

第44回全国中学校バスケットボール大会に参加して

東海大学付属第四高等学校中等部 嶋村圭太

8月22日～25日に香川県にて開催された、『第44回全国中学校バスケットボール大会』に出場いたしました。全道大会までの道のりも踏まえて、大会までの準備や現地での試合などについて報告をさせていただきます。

<全道大会まで>

今年のチームになってから、一年間を通して怪我人が代わる代わる出てくる状況でした。幸いなことに、主力選手を欠きながらも各大会でチャンスを得た選手が支えてくれたおかげで、勝利を手にするだけでなく、心配していた選手層についてもある程度克服し、安心してチーム作りをしていくことができました。

中体連全市大会からはメンバーが揃い、一つひとつの試合を全員の力で乗り切っていくことができました。しかし、ディフェンス面で隙を見せる時間帯も多く、決して内容的には満足のいくものではありませんでした。全道大会ではディナイやボックスアウトなどで少しずつ改善点が見られ、ディフェンスから速攻という、自分達らしいリズムを少しずつ出していくことができましたが、2回戦の旭川緑が丘中戦では、相手の粘り強いディフェンスに対して単発な1対1からのタフショットが続き、思うように攻めきることができませんでした。

攻守ともに全道大会まで通じていたプレーが全国大会で通じるか。課題をしっかりと整理する必要性が、より明確になりました。

<全国大会まで>

例年通り、他のブロックよりも北海道は予選を早く終えましたが、それでも時間は限られていました。その中でも全道大会を経て、主に以下の点を改めて整理する必要があると思ひ、確認・調整していきました。

- ・インサイドを基点としたオフENSESの確認
- ・ビッグマンに対してのディフェンスの確認
- ・スクリーンを利用してのセットオフENSES（及びディフェンスのスクリーン対応）

特にセンター⑦山本にマークが寄ることを予想していたので、その中でも内外両方の選手が逃げずにインサイドをうまく使うことができるかが大切だと思ひました。予選でも、マークが厳しいからといって、ポストへのパスを避け、外ばかりのパス回しになってしまい、苦し紛れのアウトサイドシュートからオフENSESリバウンドに頼っていた場面が散見され、また相手のディフェンス能力をイメージしてインサイドアウトも効果的に利用していきたいという思ひからも、準備をかけて大会に臨みました。

<全国大会>

昨年や一昨年の経験からの慣れもあるからか、選手たちは比較的コンディションに関しては問題なく、多くの方々のご支援、ご協力で、調整もしっかりした上で大会に臨むことができました。また、今回は開会式が体育館ではなく、高松市内の宿舎近くのホールで開かれたので、落ち着いた状態で参加することができました。外の暑さも極端なわけではなく、旅館の向かいにスーパーもあったので、選手はリラックスした状態で大会へと入りました。

そしていよいよ試合当日。今回も日頃からお世話になっている第四高校の小柳・浅野両トレーナーにウォーミングアップなどを協力してもらい、選手達を鼓舞しながらも状態をしっかりと整えてくれました。

①予選リーグ第1試合 vs 別府北部中学校（大分） 80-51

初戦のプレッシャーや緊張感が出てくるだろうということで、序盤からカウントプレスを仕掛けました。しかし、思った以上に硬さが見られ、ボールを思ったように奪えそうで奪えない時間が続き、それが単調なオフェンスにもつながりました。ディフェンスではスクリーンへの対応が中途半端でした。その中でも2年生2人（⑬島谷、⑮篠澤）や交代した⑤苫⑧沢井らが自分の役割を全うし、特に篠澤は⑦山本へのマークが寄る中で力を出し切れていて、前半は内容の悪い中でもリードをして終えることができました。後半は縦の走りからテンポアップすることができ、守りでも相手のエース④へのスクリーンプレーの対応が良くなってきて、最終的には全員がコートに立つことができました。オフェンスの中身があまり良くなかったので、3Pの確率の悪さ（16%）につながっていたと思います。

②予選リーグ第2試合 vs 久米中学校（愛媛） 62-53

昨年度も予選リーグで対戦していて、積極的なディフェンスや思い切りの良いシュートが印象的でした。その時はこちらが全員出場で勝利することができたので、相手は昨年度のリベンジを果たすつもりでくるだろう、と伝えていました。

序盤は、初戦よりも思い切った守りができていて、相手のミスを誘うことができていました。オフェンスでは⑥柴田がリズムよく攻めていましたが、⑦山本への執拗なマークもあり、一進一退の攻防が続きました。後半に入ってもミスが見られましたが、徐々に山本からのインサイドアウトが見られ、想定していたことに対応するプレーがようやく出始めました。相手のガードにも効果的にプレッシャーを与え、そこから動きを読み取りスティール～速攻と、少しずつ自分達らしいリズムが出ました。相手のスリーポイントで終盤追いつかれかけましたが、なんとか逃げ切り、予選1位通過を決めました。

③決勝トーナメント1回戦 vs 佐敷中学校（沖縄） 65-60

事前に聞いていた情報では、背は大きくないが、個々の能力が高く、非常に粘るチーム

と聞いていました。実際に対戦してみると全くその通りで、さらに独特のリズムで1対1の駆け引きも上手な選手が多く、終盤までもつれるゲームとなりました。

序盤は劣勢の展開。相手のプレッシャーからミス、そして速攻とあっさり点数を取られ、こちらがやりたいことを相手にされてしまう残念な立ち上がりとなりました。タイムアウト後は少しずつ思い切りが出てきましたが、予選リーグと違い、身長で勝っていてもオフenseリバウンドを奪えず、我慢の時間が続きました。その中で④長尾が一瞬の隙をつきドライブ、またキックアウトから⑬島谷のアウトサイドが入り始めて、徐々に⑦山本もインサイドで点数を重ねることができました。しかし、相手の粘り強い突破に山本が4ファウルとなり、第4ピリオド開始1分過ぎでベンチに下げざるを得ない状況になりました。一気に平均身長で下回ることとなりましたが、ここでディフェンスを踏ん張り、相手の足が一瞬止まっている間にリードを少し広げることができました。相手の意地でじわじわと追い上げられましたが、逃げ切る形で勝利しました。

④決勝トーナメント2回戦 vs 鳥屋野中学校（新潟） 54-61

試合間が1試合分しかない状況で、さらに接戦の直後ということで、体力面が気になっていました。相手は昨年私たちが敗れた西福岡中に圧勝していて、とても勢いのあるチームだと感じました。

序盤は、直前の試合の流れをそのままに、気持ちの面では一番入っていたと思います。リバウンド・ルーズボールの支配、ドライブを抑えたあとに外に戻すパスを狙いスティールなど、練習から確認していたことが良く出て、オフェンス面でも外・中のバランス、ドライブからのコンビネーションなど、前半に関しては1年間の中でも最も内容が良かったのではないかと思います（特に試合の入りが良いチームだったので・・・）。

第3ピリオドも前半はリードしていましたが、こちらも徐々にファウルを積んでいたこともあり、一瞬も油断ができない状況でした。そして相手のタイムアウト後、リズムが変わり、第4ピリオドにかけてボール運びでミスが出始めます。相手の運動量がさらに増える中で、こちらの足が止まり始めました。オフェンスではインサイドにボールを集めますが、そこでもミスが出てしまい、ついに逆転を許してしまいました。相手のシュートは終盤になってもよく入り、ファウルゲームを仕掛けるも対応され敗戦しました。

結果は2年連続でベスト8。先輩達の成績を上回り、優勝することを目標にしてきた中で、思いが実らず、悔しい気持ちは拭いきれません。勝ちきるために足りなかったことは何か、色々なことが考えられます。

まずはフィジカル面。鳥屋野戦では相手選手のインサイド陣は、外の選手にスクリーンをかけ、すぐさまインサイドに飛び込んでシールする動きをずっと繰り返していました。その動きに対応するディフェンスはある程度できていたかもしれませんが、試合中に徹底されることにより、コンタクトの繰り返しで、頭にも体にも疲れが見えました。ガード・

フォワード陣の終盤で相手を沈める脚力やシュート力だけではなく、センター陣の影の支え（ハードワーク）が、ボディブローのように効いていたように思います。悔しいですが、そこでのコンタクトや豊富な運動量に屈してしまった形でした。

また、戦術的なプレーの幅、オフェンス・ディフェンスともに引き出しの多さが、困ったときに救いになるということも強く感じます。終盤に使うための切り札のような、「プランA」「プランB」だけではなく、「プランC」「プランD」があるかどうか、ピンチの場面やファウルトラブルなどにも対応できるカギとなると思います。それはセット・オフェンスの種類や、ディフェンスのシステムだけではなく、コーチとしての言葉がけやメンタル的な部分など様々なものだと思いますが、少しでも幅を増やすために、まだまだ勉強していかなければならないと感じています。

そしてこれらを支える強いメンタル面です。本校は試合の中盤は優勢になることが多いですが、序盤や終盤に劣勢になることがよくあります（特に大会の平均得点を見ると顕著に出ています）。これもある意味、試合の入りや勝負どころなどの、大事な場面で力を出し切れるか。精神的な強さが必要だ、ということだと思います。勝ちきるため、タフさを身につけさせるためにすべきことは何か。もっと考え、実践していきたいです。

さて、本校は生徒募集停止により、今の2年生が最終学年となりました。少ないメンバーですが、最後の1年を生徒達と強い覚悟を持って戦い抜きたいと思います。

最後になりますが、生徒達を支えてくれた保護者、スタッフ、北海道のチームや先生方・役員の皆様、大会を支えてくれた関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。